

校外施設の活用に関する研究（4）

東京学芸大学附属高等学校	岩 藤 英 司
東京学芸大学附属高等学校	浅 羽 宏
東京学芸大学附属高等学校	安 井 崇
東京学芸大学附属高等学校	松 本 至 巨
東京学芸大学附属高等学校	祖 慶 良 謙
東京学芸大学附属高等学校	宇佐見 尚 子

目 次

1. これまでの経緯	128
2. 他校の活用例	129
3. アンケートの分析	132
4. 新たな妙高寮の活用プラン	134
5. おわりに	135

校外施設の活用に関する研究（４）

東京学芸大学附属高等学校	岩 藤 英 司
東京学芸大学附属高等学校	浅 羽 宏
東京学芸大学附属高等学校	安 井 崇
東京学芸大学附属高等学校	松 本 至 巨
東京学芸大学附属高等学校	祖 慶 良 謙
東京学芸大学附属高等学校	宇佐見 尚 子

1. これまでの経緯

我々は、平成19年度より「校外施設の活用に関する研究」を始め、それ以来毎年度、附属高等学校において奨励研究として申請認可され研究を進めてきている。

これらは、次のような文献に報告してきた。

- 校外施設の活用に関する研究（１） 東京学芸大学附属学校研究紀要第34集
- 校外施設の活用に関する研究（２） 東京学芸大学附属学校研究紀要第35集
- 校外施設の活用に関する研究（３） 東京学芸大学附属高等学校研究紀要第46集

改めて、これらの研究についてここに目次をまとめると以下ようになる。

- 校外施設の活用に関する研究（１）
 - 1. 研究の概要
 - 1. 1 研究の目的
 - 1. 2 研究期間
 - 1. 3 研究の内容と計画
 - 2. 今年度の研究成果
 - 2. 1 本校における校外施設の利用の経緯
 - 2. 1. 1 妙高寮の歴史
 - 2. 1. 2 親睦旅行
 - 2. 2 他校対象の調査
 - 3. おわりに
- 校外施設の活用に関する研究（２）
 - 1. はじめに
 - 2. 今年度の研究成果
 - 2. 1 他校対象のアンケート調査
 - 2. 2 アンケート調査の結果・考察
 - 2. 2. 1 校外施設の所有について
 - 2. 2. 2 校外施設の概要について
 - 2. 2. 3 校外施設の運営について
 - 2. 2. 4 校外施設の利用状況について
 - 2. 2. 5 校外施設の利用・運営における効果・メリットについて
 - 2. 2. 6 校外施設の利用・運営における課題・問題点について
 - 3. まとめ
- 校外施設の活用に関する研究（３）
 - 1. はじめに
 - 2. 妙高寮利用の新たな展開

3. 本校55期生スキー学校
4. 本校51期生保護者親睦旅行
5. 平成20年度東京学芸大学附属高等学校理科SPP特別公開講座現職
教員研修
6. おわりに

これまで、過去3年間の研究にあたっては、多くの方々からご協力をいただき、年次ごとに深めながら研究を進めてくることができた。あらためてここに感謝の意を表したい。

これまでの過程の中で、研究内容に対していろいろ各方面の方々から様々なご意見を頂いてきている。我々に協力してくださる方が新たに現れたり、中には思いもよらないアイデアを寄せてくださったりする方も現れたりした。皆様に支えられながら研究をさらに続けていくことができる喜びを感じながら平成21年度も研究に取り組むことができた。

今年度は特に昨年度までの成果を踏まえて、都立日比谷高等学校のご協力を得て、他校での校外施設の利用の仕方の具体例を実地に取材させていただき、本校の妙高寮活用プラン構築の重要なヒントをご示唆いただくことができた。

また、本校の教育課程委員会が、平成22年11月に行われた、東京学芸大学第9回公開教育研究大会にて発表した、「本校生徒、保護者、教員に対する林間学校に関するアンケート調査結果について」妙高寮委員の立場から若干の考察を試みた。

今回は、これらを中心に報告する。

(文責 岩藤英司)

2. 他校の活用例

2.1 概要

近年、妙高寮で定期的実施されている行事は、林間学校と一部のクラブの合宿、保護者対象の年3回の親睦旅行にほぼ限られている。本校の歴任教職員や卒業生の方々が多大な労力を注いで設置し、維持してきた寮を今後も守っていくべきだと考えるのならば、経営上の観点から寮の利用状況を改善することは重要な課題である。その際、スキー学校や合宿等以前は寮で実施されていた行事の復活の可能性も検討すべきだろうが、寮を利用した新しい行事や企画を考えることも必要ではないかと思われる。

こうした意味で、現在寮を保有している他の学校がどのような行事や企画を行っているかということは、本校にとって大いに注目される場所である。

そこで、今年度は本研究の一環として、勝山寮（東京都立日比谷高等学校合宿所）で実施されているセミナーに松林忠利氏（株式会社泰山会）と安井が参加させていただいた。以下、勝山寮とセミナーの概要を紹介し、妙高寮の活用という観点からどのような示唆を汲み取れるか検討した内容を報告する。

表1 勝山寮の主な施設

食堂	100人	(会議・講習)
会議室	24人	続き利用可
和室	12.5畳	
103号室	7.5畳	
104号室	7.5畳	
105号室	10畳	
106号室	6畳	(救護室)
201号室	16畳	続き利用可
202号室	15畳	
203号室	20畳	
204号室	20畳	続き利用可
205号室	20畳	
206号室	20畳	続き利用可
207号室	16畳	
208号室	9畳	

* 「勝山寮」(財団法人星陵会)により作成

2. 2 勝山寮の概要

勝山寮は千葉県の鋸南町にあり、日比谷高校の後援会である財団法人星陵会が運営している。

星陵会が公開している勝山寮 Web ページ (<http://www.seiryokai.org/katsuyama.html>) によると、勝山寮は旧制府立一中の水泳宿舎として発足し、現在は日比谷高校の校外活動合宿所として利用され、一般の教育研修活動等の合宿所として公開されている施設である。オープン期間は5月1日から10月30日で、利用料金は一泊二食付（中学生以上）で一般5775円、教育研修関連が5250円、中学・高校・大学生の団体が4200円で、これは公益法人の教育研修用施設として低額に設定されている。

東京からの所要時間は、JR 内房線の特急を利用した場合、東京駅から安房勝山駅まで約1時間30分、駅から徒歩6分である。寮自体は海に注ぐ佐久間川の川沿いの場所にあり、海岸まで徒歩でもすぐに出ることができる。建物は鉄筋コンクリートの2階建ての字形の建物の中央に中庭が設けられている。主な施設は表1の通りで、1階に管理事務室・食堂・会議室・浴室などが設けられ、2階は主に客室になっている。特徴的な施設として、都立日比谷高校では水泳部OBを指導者とする臨海学校が行われており、古式泳法による遠泳が実施されていることから、その際使われる和船を収納する艇庫がある他、浴室の配置等も水泳での利用などを意識して工夫されている。最大収容人員は約100名であり、妙高寮とほぼ同じである。

2. 3 勝山ビーチセミナーの概要

今回、松林氏と安井が参加した企画は、第11回勝山ビーチセミナーである。

案内状によると、このセミナーは「毎回各界の第一線で活躍されている日比谷高校先輩を講師に迎え、その日比谷高校の教育施設である勝山寮で開催」する「全員参加型の楽しいセミナー」である。

参加定員は40名とされており、当日参加者の方々から聞いたところによれば、参加の呼びかけは主に関係者の紹介によって行われているようである。主催は勝山ビーチセミナー実行委員会となっているが、この委員会は前述の臨海学校の指導に当たっている日比谷高校水泳部やPTA役員のOB・OG有志で組織されており、セミナーの企画から寮の予約・手配、当日の運営をすべて行っている。

今回のセミナーの概要は次の通りだった。

第11回勝山ビーチセミナー「科学する心を取り戻そう！」

- ・日時：2009年10月10日（土）～11日（日）
- ・参加費：1人8000円（1泊2食・昼食・懇親会費）
- ・講師：三浦謙一博士（日比谷高校卒業生）

富士通研究所フェロー・国立情報学研究所教授・国立天文台客員教授

- ・スケジュール

第1日 13:45 勝山寮集合

14:00～17:00 第一セッション

「科学する心を取り戻そう！—ドクター・ミウラのおもちゃ箱から—」

*物理おもちゃについての講習と実演が行われた。

入浴・夕食

20:00～22:00 質疑アワー・懇親会

*講師の皆既日食観測の様様や写真、球形のスクリーンに像を投影するプロジェクタ等が披露された。

23:00 消灯・就寝

第2日 朝市・バードウォッチング・漁港散策

7:30 朝食

9:00～12:00 第二セッション

「コンピュータの話—より速い計算機をめざして—」

* 講義の中で歴史的に重要なコンピュータのチップの実物等が披露された。

セミナーの詳細についてはここでは紹介できないが、第一セッション・質疑アワー・第二セッションとも、高度な内容を専門外の参加者にも分かりやすく伝えてくれる興味深いものだった。

たくさんのおもちゃやコンピュータの部品、写真・プロジェクタが用意されていたのはとても楽しく、そうした準備を整えてくださった講師や主催者の方々の熱意に感銘を受けた。参加者の多くが気心の知れている間柄で、リラックスした雰囲気の中に日程が進行して行き、その中では例外的に日比谷高校関係者以外の参加者である我々も楽しい時間を過ごすことができた。



写真1 第一セッション



写真2 第二セッション (資料)

2.4 勝山ビーチセミナーから学ぶこと

今回のセミナーに参加して、講師や参加者の方々と親密な時間を過ごすことができる宿泊型のセミナーの楽しさを実感し、こうした企画を妙高寮で実現できるかどうか検討してみたい気持ちになった。ただし、こうした企画を成功させるには、いくつかの条件があることも事実だろう。

そのもっとも重要な条件は、あまりに当然のことかもしれないが、優れた講師の方に来ていただくことである。今回のセミナーの楽しさの多くの部分が三浦博士の専門性の高さ与人柄に負っていたことは疑いない。ただ、それだけでは今回感じたようなリラックスした親密な雰囲気にはならないように思われる。そこにはやはり、同じ学校に生徒や保護者としてかかわった講師や参加者が、その学校の施設に集まるといことがかかわっているように感じられた。この点にかかわって付け加えれば、優秀な卒業生を講師に迎えることができるという点で、旧制一中以来の日比谷高校の伝統あってこそこの企画ということもできるだろう。

以上の点を踏まえて、勝山ビーチセミナーのような卒業生・学校関係者を中心とした宿泊型のセミナーを妙高寮で開催できるか考えてみると、十分可能性はあると考える。

本校は日比谷高校に比べれば伝統の浅い学校ではあるが、多くの卒業生が幅広い分野で活躍していることは言うまでもない。また、多くの卒業生にとって、林間学校は世代を超えて共通の体験になっているはずである。近年利用頻度が下がっているとは言え、多くの卒業生にとって、妙高寮は林間学校の思い出とともに懐かしい

場所として心のうちに刻まれているのではないだろうか。勝山ビーチセミナーのような企画を実現する基本的な条件は、本校と妙高寮にも備わっているように思われる。

とはいえ、勝山寮と妙高寮に重要な相違点があることも事実である。

1つは東京からの距離である。卒業生等が宿泊をとまなう企画に気軽に参加できるかどうか考えた時、東京からの交通の便というのは重要な要素になってくると思われる。関越自動車道や長野新幹線を利用することを考えると、安房勝山と妙高までの所要時間は実はそれほど違うわけではない。しかし、電車の本数や運賃も含めた印象も考慮すれば、やはり妙高寮は遠いと言わざるをえないだろう。

寮の施設についてもプロジェクタや長机等がすぐに利用できる会議室がある勝山寮に対して、妙高寮の場合はセミナーのようなものはすべて広間で行わなければならない、使い勝手の面で見劣りすることは否めない。

ただ、参加者の方の話によれば、勝山寮も当初から会議室などを備えていたわけではなく、日比谷高校以外の教育研修での利用なども想定して、改修して会議室を作ったようである。

また、前述したように勝山ビーチセミナーは卒業生やPTA関係者によって運営されており、現在の日比谷高校の教職員は直接関わってはいない。この点、教員・生徒等が積極的に協力して利用する妙高寮は、それが良き伝統であることは間違いないが、現在の教職員・生徒以外の利用者にとっては、やや近づきにくいところがあるかもしれない。

いずれにしても、卒業生・PTA関係者が思い出を共有する学校の施設でリラックスした雰囲気のうち楽しく学ぶという企画は、大変魅力的なものであった。今後、妙高寮をどのように活用していくか考える上で、勝山ビーチセミナーへの参加は非常に貴重な体験となった。

* 第11回勝山ビーチセミナーへの参加は、松林忠利氏のお取り計らいによって実現した。また、このセミナーとしては例外的な日比谷高校関係者以外の参加者を暖かく迎えて下さった講師の三浦謙一博士その他参加者の皆様、勝浦ビーチセミナー実行委員会の皆様にこの場を借りて御礼を申し上げたい。

(文責：安井 崇)

3. アンケートの分析

今年度は、附属高校において公開研究大会が実施された。本校教育課程委員会では、生徒、保護者および本校教員を対象に、妙高寮で毎年実施されている林間学校についてのアンケート調査を実施し、公開研究大会にて報告した。ここでは、我々校外施設の活用に関する研究を進めている立場から若干の考察を試みたので、それについて報告する。

3. 1 全体の傾向

本校教育課程委員会によるアンケート調査結果を見る限り、林間学校の意義は生徒には概ね認められているということができよう。

例えば、

①自然の中で生活し、自然に対する理解を深められましたか。

については、深められた、とまあ深められたで85%。

②登山を通して、自分自身の体力の限界に挑めましたか。

では挑めた、とまあ挑めたで79%。

③共同生活の中での相互の親睦と全体の秩序を大切にできましたか。

では、できた、とまあできたで80%。

④林間学校を通して、調和のとれた心身の発達ができたと思いますか。
では、やや低下してくるが、思う22%、まあ思う45%などである。

3. 2 意義を認めにくいもの

評価が低いものは、

「個性を伸長させるのに役立ったのはどのプログラムですか。」

の問で、該当なしが生徒10%、教員18%にも上る。

また、

「林間学校を通して、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうという気持ちになりましたか。」

に関しても、全くならないが生徒1%、保護者2%、教員0%但しあまりならないが17%で、生徒はそれほどでもないが、教員の評価が低い。

同様に、

「林間学校を通して、自己を生かす能力を養えましたか。」

の問には全く養えなかったが生徒4%、保護者2%、教員0%但しあまり養えなかったが21%、と教員の評価が低い。

3. 3 教員側と生徒の意識のずれ

全体を通じて、生徒の中で全く意義を認められないという回答が常に1~11%にものほり、事前指導などを通して指導すべき点も多いのではないと思われる。

例えば、上記の①では生徒に2%、保護者に1%、②では「全く挑めなかった」が生徒、保護者に1%、③では「全くできなかった」が生徒2%、保護者に1%、④では「全く思わないが生徒2%、保護者に1%」となっている。

これらの4項目では教員の回答はすべて0%であり、主催者側では当然意義を認めたい項目である。両者の意識のずれは、例えば、林間学校を通して、「いく前と自分がどのように変わったと思いますか。」について、「登山や野外活動を通じて体力がついた。」が生徒21%、教員12%、保護者23%と倍も開いている。

(文責 浅羽 宏)



写真3 林間学校1



写真4 林間学校2

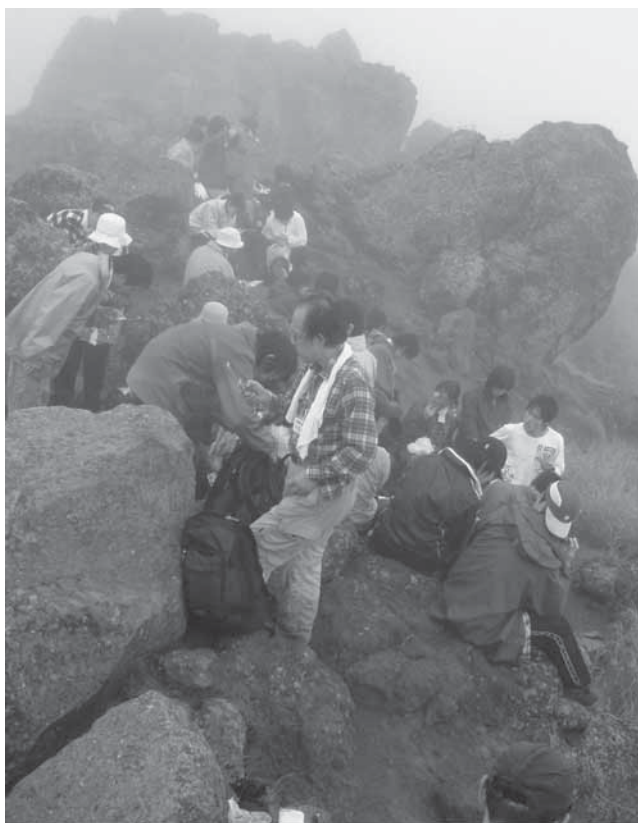


写真 5 林間学校 3



写真 6 林間学校 4

4. 新たな妙高寮の活用プラン

本論文の冒頭に述べたこれまでの文献に報告してきたとおり、本校の妙高寮の活用について新たな取り組みを幾つか試みてきた。今後、さらなる活用を図るべく、今回の日比谷高校への実地の取材などをもとに、さらなる検討をした。その際に、株式会社泰山会長柴山喬一氏および事務局長松林忠利氏、PTA泰山会役員の方々、本校同窓会役員の方々にも多くの貴重なご意見をいただき、ご協力を得ながら次のようなプランを立案した。

4. 1 親睦旅行の改善

保護者対象の年 3 回の親睦旅行について、次の表 2 のような改善点を見出した。

表 2 親睦旅行の改善プラン 5

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1 旅行の訪問先の改善（年 3 回の差別化）2 懇親会内容の改善（終了時間の改善、内容の充実化）3 保護者の協力体制（PTA 役員からの協力の申し出）4 同窓会との連携体制の改善5 利用交通機関の変更と低価格化の実現への検討 |
|--|

特に「差別化」ということが大きな課題であり、どのように年 3 回の参加人数を確保していくかを今後より検討していきたい。

なお、平成 21 年度親睦旅行では、ご参加くださった保護者のうちの何人かの方々が旅行記を自主的に作成

しその次の親睦旅行の参加者募集を呼び掛けてくださったり、冬季には PTA 泰山会の役員の方々が自主的に参加募集の案内文書を作成して保護者全員に配布して下さったりするなど、多大なご協力をいただくことができた。本校教職員と保護者のよりよい関係をさらに築き上げながら、今後も、親睦旅行の目的を十分果たせることを念頭に置いた改善を図っていきたいと考えている。

4. 2 その他の新たなプラン

我々の研究が株式会社泰山会の役員の方々からも注目され、今回、妙高寮の活用について多くのご意見をいただくことができた。その中で、株式会社泰山会主催行事を同窓会と協力体制をとりながら実施していく意向をご提案いただいた。

以下の表 3 は、その概要である。

表 3 株式会社泰山会主催旅行プラン

旅行名	日程 (予定)	料金	交通方法	内容	募集対象	募集人員
妙高研修会	6 月下旬	約 1 万 5 千円	往復貸切バス (池袋～妙高)	ワイナリー研修、山 菜講習 (講師：教員)、星空観察、	現役生および卒業生 の保護者、同窓生 (52 期以上)	約 30 ～ 50 名
妙高研修会	8 月	約 6 千円	各人の負担で 妙高寮集合	妙高登山 (講師：教 員)	現役生および卒業生 の保護者、同窓生 (52 期以上)	～ 20 名
妙高研修会	9 月下旬	約 1 万 5 千円	往復貸切バス (池袋～妙高)	きのご講習 (講師： 教員)、源氏物語講 習 (講師：)	現役生および卒業生 の保護者、同窓生 (52 期以上)	約 30 ～ 50 名

これらの特徴は、交通方法を新幹線ではなく貸切バスや現地集合に変更して旅行全体の費用を低価格化を図った点と、研修としての内容を本校の教員を講師とした講演や講義という形をとることにした点にある。また、参加者は本校の現役生徒の保護者ばかりではなく卒業生の保護者や同窓生にまで広げている点も特徴の 1 つである。

これらのプランについて、来年度以降、実施に向けて詳細を詰め改良しながらよりスムーズに運営できる方法を模索し、各方面との万全な協力体制を整え、支障なく実施できるように努めていきたいと考えている。

(文責 岩藤英司)

5. おわりに

文中にも所々に書いてきたが、本研究が 4 年目になり各所より注目されるようになってきたため、思わぬところからのご協力をお申し出戴くことが度々見られるようになった。本校の特色の 1 つとして、同窓生をはじめ保護者の方々や東京学芸大学などの名だたる優秀な人材に恵まれている事があり、それが本研究にも反映されて来つつあることを感じる。

さまざまところから期待されているこの研究が、今後更に進められ、その期待に十分応えられる形に発展していくことを望む。

(文責 岩藤英司)